

# 最終氷期後1万年で5度上昇＝世界最大サンゴ礁の水温一豪 沖掘削で判明・国際チーム

## ANA日本行きビジネスクラス

ana.co.jp

欧州経由 ¥2099～、羽田直行 ¥2499～ 7/19-R/31の出発、6/20までの販売

オーストラリア北東部沿岸にある世界最大のサンゴ礁、グレートバリアリーフの沖合を初めて掘削して化石を採取したところ、最終氷期で最も寒かった約2万年前の海面水温は、約1万年前から現在に至る間氷期より5度程度低かったと推定されることが分かった。

グレートバリアリーフは、寒冷な時代も現在より規模は小さいとみられるが存続したことが判明。その後1万年間で5度の水温上昇は、サンゴにとって厳しかったが適応できたと考えられる。

東京大学大気海洋研究所の横山祐典准教授らの国際研究チームが2010年春に掘削調査を行った成果で、17日付の英科学誌ネイチャー・コミュニケーションズに発表した。

しかし、チームメンバーで産業技術総合研究所海洋環境地質研究グループの鈴木淳グループ長は「現代は当時をはるかに上回るペースで温暖化が進んでおり、グレートバリアリーフのサンゴが今後も適応できるかは分からない」と話している。



世界最大のサンゴ礁グレートバリアリーフの沖合を掘削して採取した試料と横山祐典東京大准教授（写真中央）ら（2010年、掘削船「グレートシップ・マヤ」船上。ECORD・IODP提供）



オーストラリア・タウンズビルに停泊中の掘削船「グレートシップ・マヤ」。世界最大のサンゴ礁グレートバリアリーフの化石を掘削した。写真左は横山祐典東京大准教授（2010年、横山准教授提供）

グレートバリアリーフは世界遺産で、現在生息するサンゴを傷つける調査は許されない。このため日米欧が主導する統合国際深海掘削計画（IODP）の一環として、主にケアンズ沖とタウンズビル沖の水深40～170メートル程度の地点を慎重に選び、欧州が運用する掘削船「グレートシップ・マヤ」（4850トン）で掘削した。（2014/06/18-00:13）